

釣れ釣れなるままに

1999年思い出の釣行記 PART. 4

# 金色に輝く魚体

鹿島釣狂





☆釣行日 平成11年6月27日  
☆入釣場所 石狩川と美唄川の合流地点  
☆釣果 ナマズ 53cm  
真鮒 34cm 32cm  
ウグイ 40cm

## 仕事の合間を縫って

本日は日曜日だというのに私が勤務している職場の施設を使って地域の保育園の運動会があるという。カギの開放と施錠、そして機械警備の設定のために朝早くから職場に出向いた。日曜日は労基法上の休日であるはずだ。しかし、職務上、日頃地域に大変お世話になっていることもあり断りにくい。「釣りに行きたい」という心の葛藤を押さえて笑顔で迎え入れる。もちろん行事が終わった後も笑顔とねぎらいの言葉をかけるのを忘れない。後日、保育園関係者からビール1ケースをいただいた。私が飲める口であるのを知っていたらしい。

午後2時頃、ようやく時間ができたので以前から職場の同僚に誘われていた石狩川に釣りに行くことにした。電話を掛けるが彼は群別に釣りに行っており、今、入れ食いの真っ最中だと言う。仕方なく一人で行くことにする。

仕掛けは彼からとっておきのものを戴いている。以前、90cmを超える大物を上げた時のものと同じものである。見かけはシンプルだが相当時間を掛けて作った様子うかがえ

る。

餅はミミズである。てっきり鯉は芋か団子と思っていたが、ミミズでよいそうである。それもとびっきり大きな手枕ミミズである。こんな時わが家の畑に積んでおいた雑草が役に立つ。そんなに広い場所ではないのだが一方所で手枕ミミズを20匹ほど捕まえる。一応、念のために釣り道具屋へ行ってシマミミズも購入しておく。

## ポイントを探して

彼からは水門の前辺りがそのポイントであると聞いていた。また、そのポイントは美唄川と石狩川の出合いであるとも聞いていた。水門のところから入るが出合いといわれるポイントらしきものは見当たらない。川に沿って下流に下る。ヤナギの木やイタドリが密集し、なかなか前には進めない。暑い日であったのでヤブ蚊やブヨが顔の回りをブンブンと音を立てて飛び交う。距離にしては僅かなのだが40分ぐらいも費やして川に沿って下った。ようやくそのポイントらしき所にたどり着く。なるほど向かいには美唄川と石狩川がぶつかりあい、手前は深い淵になっていていかにも大物が潜んでいそうな雰囲気を漂わせている。

大きめのミミズをつけて第1投を川面に送り込む。すぐに大きなアタリがあり、合わせると道糸が竿から外れて行った。道糸を竿に結びつける時、そのつけかたがまずかつたらしい。取って置き仕掛けをいただいたのに惜しいことをした。仕方なく、替わりの仕掛けを作り、同じように振り込む。まもなく25cm程のウグイがバタパタと釣れ出す。

## 金色に輝く魚体

ウグイとしばらく遊んだ後、同じようなアクリがあり、同じように合わせると、今度はキーンと道糸が鳴り出す。このために新調した鯉竿が満月のようにしなり、手元に伝わってくる手ごたえも大物を予感する。念のため、タモを差し出し魚を取り込む。金色に光る真鮎である。

私は子どもの頃から近くの池や川で釣りに親しんでいるが30cmを越える鮎を釣るのは初めてである。尾鰭にかかる部分が傷ついており赤く染まっているのと、尾鱗そのものも幾つかに別れている様子は痛々しかったが、丁寧にフラシに入れておく。さらにすぐにアタリである。先程と同じような鮎が川面に金色の背中を見せて走っている。余裕が出てきたのか少し魚の引きを楽しんでから魚を取り込む。先程とは違って傷一つないきれいな黄金色の魚体に、釣り用のハサミについたメジャーを当てると、今度は34cm程ある。またまたすぐに新記録更新となる。

## 白い腹を見せて

少しアタリがなく間があったので、今度は2号の磯竿を用意して仕掛けを作り流れの間ほどに打ち込む。すぐにアタリがあり先程よりも手ごたえが大きい。しかし、素早い動

きはなく、重くどんよりとした動きである。時折見せる白い腹がその大きさを物語っている。タモを差し出すがすんなりとは入ってくれない。ようやく取り込むと大ナマズである。

ナマズの何となくにやけた顔には、ピンと張った勇ましい髭が似合う気はしない。むしろ鯉についている垂れ下がった髭が似合うと思う。どんな餅にもくわえ込んだら絶対離さないというように、口にはブラシの様な細かい歯がびっしりとついている。

子どもの頃にもナマズを釣ったことがあるが、それと比べて大きさはどうだろう。子どもの頃であったので非常に大きく感じてはいたが……。しかし、子どものころに釣ったものはでっぴりとした腹が妙に印象的であったが、これは随分とスマートである。50cmのメジャーを当てると大きく尾韃がはみ出している。これも新記録達成か？

## 大物鯉は次の機会に

気分をよくしてタまずめを迎えた。釣れてくるウグイは30cmを越えるものばかりとなり、時折40cm級が混ざるようになってきた。対岸の柳の下では、大きな鯉と思われるモジリがあり、ガバツ、ガバツ、バシャバシャツ、バツシャンと水音を立てている。あの鯉を釣りたい。あの鯉を釣りに今日は来たのだ。そう思い竿を振るが、それは対岸の事であり、磯竿でも今日の道具立てでは届きそうもない。しかも頭上の柳の枝が邪魔をして竿を大きく振ることができない。この次に来たときにはルアー竿で狙ってみよう。陽もすっかり落ちて、辺りが薄暗くなってきたので今日のところは竿を畳むことにする。

ビニールバケツを持ってきていたのでそれに魚を入れ、慌ててわが家に戻る。早速、カメラを用意して娘に振ってもらう。鮎もナマズも比較的生命力があるのに加えて夜も暮れてきたこともあり、バツカンに水を張り魚を入れておいた。次の日、魚を川に帰すべく朝早く起きてバツカンを覗いてみると、残念ながらどれも死に絶えていた。かわいそうなことをした。初めてのことであり、まずは手慣らしだけと思い、写真など撮るような大物に巡り会えるとは思っていなかった。この次の機会には必ずカメラを持参し、1メートルを超す野鯉を抱えてシャッターを押すことにしよう。請うご期待！